

第3回

東京都発達障害教育推進会議(発言要旨)

発達障害教育の基盤整備に際しての
「児童・生徒の成長段階に対する配慮」
「障害特性や不適應状況の程度の対する配慮」

会議日程：平成25年10月16日

東京都教育庁都立学校教育部特別支援教育課

「都内公立学校における発達障害に関する調査について」

事務局

- ・都内の小・中学校及び高等学校における発達障害の可能性のある児童・生徒の状況を把握するため、「都内公立学校における発達障害に関する調査」を実施することとした。
- ・調査では、学校現場で教員が、どのような困難を抱え、どのように感じているかといった教員の視点から、意識等を含めて把握したいと考えている。
- ・調査対象は、小・中学校及び高校の担任教諭、特別支援コーディネーター、校長先生、保護者代表とし、都内の公立小・中学校は各400校、都立高校・都立中等教育学校は全ての学校、全ての課程において実施する。

委員

- ・国の調査は一人一人の児童をチェックしているが、今回の調査は学校が特別支援の対象として把握している児童の調査に近い。今回の調査が、国の調査と位置付けや考え方が違うことを明確にしておくべき。

「発達障害教育の基盤整備に関しての児童・生徒の成長段階に対する配慮、障害特性や不適合状況の程度に対する配慮について」

【高機能自閉症・アスペルガー障害等（就学前の段階から小学校段階まで）】

- ・短所を少しでも無くしてやろうというやり方は成果が上がらない。上がらないどころか子供に劣等感を持たせてしまう。長所に目を向け、優れている点をより良くできるようにすべき。
- ・得意なことを指導するより、後ろから押してやるという意味で、支援するというニュアンスが大切
- ・弱いところは、将来、大きくなって生きていくときに、不都合にならないか見定めのようなものを、教員と保護者、あるいは学校ぐるみで考えるべき。
- ・今の教育現場では、教育課程編成があって、全般的に満遍なくというのがベースにあるという点で、発達障害を考えたときに非常に課題が多い。
- ・将来社会参加させるという視点に立ったとき、長所を伸ばすことはものすごく大事だが、社会不適合を起こす可能性のある要素については徹底指導が必要
- ・アスペルガー症候群の子供のなかには、学習上の課題が見られる子供もいるが、テストなどでは点が取れている子供も少なくない。ただ、点が取れても正確には理解できていないケースも多く、ここは社会に出る前に徹底指導しなければならない。
- ・発達の課題がある子のなかには日本語の言語技術が弱い子が少なくない。特に自閉症スペクトラム圏の子供は、小学校に入る前から言語の指導をすべき。
- ・就学前でも、発達障害の子は、問題行動、情緒不安定のために友達と関わっていくことが苦手だったりするが、構造化したり学習スタイルの多様性を踏まえた指導するなど園全体で情報を共有して指導にあたっていくと、パニックを起こすことも減ってくる。そういった視点で教員同士の情報共有が就学前から必要

【高機能自閉症・アスペルガー症候群（中学校段階から高等学校段階まで）】

- ・小学校と中学校以降では、学校生活が大きく変わる。単純に教科担任制に変わるというだけでなく、小学校の頃は、人間関係において横のつながり、学年ごとのつながりがほとんどで、縦のつながりはまだ希薄なので、同年齢の子供たちとの集団が中心になる。中学校以降は、部活動やその他の活動で、縦のつながり、先輩・後輩という関係が出てくる。
- ・中学校になった途端に、自主・自律を求められる。集団活動も、自主的な運営が求められるようになる。そういった活動は、はっきりと決まったルールがなく、いわゆる暗黙の了解や規律のようなものが大事にされる。
- ・はっきり物事を言わない年代に変わっていく。ほのめかしや、ちょっとした表情の変化で友達に何かを伝える。また、SNS等など、いろいろな手段を使って友達に伝えるという友達関係ができてくる。
- ・入試あるいは就職というような一つのゴールに向かって、みんなが進むような構造になっているところが多い。
- ・高機能自閉症やアスペルガー症候群の子供たちは、突然始まる縦の関係や、突然求められる自主・自律、自主的な運営、暗黙のルールや規律が分かりにくいいため、何もできなくなるとか、うまくいかないということが目立ってくる。
- ・学力が低下している子供たちは、ある程度支援の網に引っ掛かる。あるいはパニックを起こすとか、行動上の問題が激しい子供たちは、それなりの支援を既に小学校時代に受けていることが考えられる。
- ・一番難しいのは、おとなしいタイプで、しかも学力がある程度高い子供たち。小学校では、大きな流れにくっついていれば過ごしてこられたが、中学校・高校になって、急に自主的に活動することを求められるようになると、何もできなくなる。
- ・思春期に何となく自分が奇異な目で見られているとか、みんなの中に入れていないということには気づき始める。本当の意味を理解することは難しいので、何とかしようと頑張るが、うまくいかないことが起きてくる。
- ・高機能自閉症やアスペルガー症候群でも、この時期、子供たちはやっぱり親離れしたいと考え始める。自分自身ができないことは、本来なら、友達によってその部分が補われていくが、やみくもに友達を求めて追いかけて回してしまったり、あるいは不適切な関わり方をしてしまったりということが起きてくる。あるいは、非常に孤立してしまう。
- ・教員が、彼らと同年代の友達の間をつなぐ役割をする必要がある。本人の言い分を周りにうまく伝えたり、周りが本人を理解するための手掛かりを周りに与えたりという部分で、教員によるサポートは非常に重要。そのための教員の体制作りも非常に重要
- ・この時期、教師にべったりと関わられるのは好まないため、教師がさりげなくサポートできるような体制や共通理解、情報共有が必要
- ・子供たちの手本として、教師自身が振る舞うことも非常に重要。人との適切な関わり方や、こう関われば良いんだということを伝える役割もあるだろう。
- ・高校を卒業して社会に出たら、自分の周りにいる人に同年代は少なく、圧倒的に多いのは異年齢なので、友達は違う年齢の人でもなり得ることを伝えていくことが大事。教師自身が、その子供の友達あるいは兄弟あるいはサポーターのような存在になることも重要
- ・中学校・高校時代に、彼らが周りの大人から適切な支援をもらい、人と関わることの楽

しさを、こう関わればうまくいくんだという成功体験を積んで、その先の社会に出ていくことが大切

- ・大人というものが信頼できるかできないかということをきちんとこの時期に伝えてあげる。この大人と関わることで、自分は助けてもらえるだろうとか、自分は楽しい経験ができたという体験をもって、その先に進んでいけるということが重要
- ・学習に関しては、基本的には能力の高い子供たちなので、小学校高学年から中学校、高校段階では、良いところを伸ばし、学習意欲を下げないことが非常に重要。好きな勉強に打ち込めるような支援、あるいは好きな勉強の分野が活かせるような職業選択もあると伝えてあげることが、非常に重要になってくる。
- ・教師が、サポート役として本人と友達をつなぐ役割というのは、小学校段階から必要。特に障害理解を考えたときに、こういった仕組みをどう作っていくかが非常に重要だが、更に、年齢が上がったときの配慮点というのが、付加される。
- ・高機能自閉症やアスペルガー症候群の子供たちが、障害理解とまでいなくても、自分自身に特性があるということはある程度分かっているならば、教師は支援、サポートをしやすい。分かっている子供たちは、何だかうまくいかない、どうも思うようにいかないという思いだけなので、全面的な支援とか、先生がそばにぴったりくっつくような支援は嫌がるだろう。
- ・教員がさりげなく周りの子供とのバランスを考えながら、うまく支援する必要があるし、そのためには、学校全体での情報共有や支援方針の共通理解をしておくことが非常に重要
- ・個々の問題についてだが、例えばこだわりが特性だとしても、それが反社会的行動につながりやすいこだわりであれば、やはり修正・指導していく必要がある。
- ・いじめの被害者にもなりやすいと同時に、本人が気付かないうちに加害者にもなる可能性がある。そういう可能性を軽減させるような指導を、アスペルガー症候群に限らず実質的に行う必要がある。
- ・アスペルガー症候群や自閉症が原因で犯罪が起こるというエビデンス（根拠）は一切ない。犯罪は一つの理由から起こるわけではなく、複数のリスク要因が重なり、保護要因が弱いときに起こりやすい。そこを間違えてはいけない。
- ・たとえばリスク要因の一つに「攻撃性」がある。これ自体は発達障害の特性ではない。ただ、発達の課題があり、ニーズベースの指導を受けないままだと、結果的に失敗経験ばかり積み重ねることになり、結果的に攻撃性が上がって社会適応が難しくなるケースもある。そういう予防的観点も指導や組織経営には必要だ。
- ・好きなこと、得意なことということで、クラブやサークルへ上手に導いてあげることは重要

【ADHD（就学前の段階から小学校段階まで）】

- ・非行や不登校が前面に出ている、その問題ですっと指導はされているが、発達の側面への配慮というのが全くなされていないケースもかなり多い。
- ・不安障害など、発達障害の枠組みの中に入らない子供たちがたくさんいるということも押さえておくべき。
- ・ADHDは、自閉性障害や学習障害、軽度の知的障害など、ほかの障害と併存することがあるということが正式に認められつつある。また、虐待や家庭内不和などの影響も受けやすいので、その影響を切り離すことは難しい障害である。
- ・教師からの叱責や仲間とのトラブルによって、反社会的な行動につながりやすく、また非社会的、鬱的な状態につながりやすい。
- ・症状などが治まってくると社会的に活躍する方もいるが、重症のケースになると、医療との関連というのが非常に大事になってくるし、教員が非常に困る状況につながりやすい。
- ・高い専門性が必要で、例えば家庭環境などが絡んでくると福祉との連携が必須なので、限られた学校教育の中だけで考えていこうという前提を取り去る必要がある。
- ・小学校高学年の時期、思いどおりにならないときに感情を爆発させたり、ルールが守れなくなりやすい。自分に都合のいいようにルールを変えたり、自分が勝ちたいがためにという自分の欲求を抑制できないということが、教室の中ではかなり激しく出るとされる。
- ・身の回りのものを整理したり、必要なものを準備することが苦手
- ・目標に「自分の感情をコントロールできるようになる」とか書く教員がすごく多いが、ADHDはそこが主障害であり、環境の周囲の配慮によって行動が変容することが多い。本人が我慢できない状況になったときに、周りが見守るとか、興奮した状態のときに刺激しないようにするとか、カムダウンエリアに早目に誘導するとか、そういった周囲の配慮、周囲の対応によって行動が変容する。
- ・カムダウンエリアも、使用の仕方によっては、お仕置き部屋になってしまうことがあり、教員によく理解してもらいたい。文章だけでは誤解されやすいので、専門的なアドバイスというのが非常に大事。
- ・できているところに注目するというのは、ADHDのペアレントトレーニングにおける一番大事な技術で、今できているところに注目して、それを増やしていくというのが鉄則

【ADHD（中学校段階から高等学校段階まで）】

- ・7割は高機能自閉症だけでも、ADHDが2割入っているというケースなど、発達障害は単純に一つだけの問題ではないことが圧倒的に多い。
- ・例えばADHDと言っても、現在の考え方では、不注意と多動・衝動性と分けることが多いが、不注意の子供は一生、不注意だけの人もいるし、多動・衝動性両方持っている人もいる。
- ・ADHDと言っても、ADHDの要素、学習障害の要素、アスペルガーの要素を併せ有している人がいるし、それに加えて知的水準の問題もあるので、支援をどうしたら良いかは、ものすごく難しい。
- ・ADHDの不注意はずっと大人になっても続くだろう。多動は、個人差があるが、一般的には減っていく、目立たなくなってくる。衝動性は、個人差があるが、周りの状況でもの

すごく違ってくる。

- ・ 社会不適応による反社会的な問題につながらない発達障害の人もいっぱいいて、置かれる環境や対応でも違ってくる。
- ・ 発達障害の人は、学校の対応だけではなく、家庭と学校の対応が異なると混乱する人が多いので、この対応は非常に重要
- ・ 高校生ぐらいになってからADHDであることに気が付いた人は、どちらかという不注意優勢型が多く、多少問題があっても成績が良ければ学校は卒業できるが、その後、社会性が問題になって、困っている人もいっぱいいる。
- ・ 最近の医学の報告だと、不注意優勢型の方というのは、子供の場合の男女差は、4～5倍男子が多いと言われているが、成人の報告を読むと、1.5倍ぐらいしか違いがない。原因はよくわからないが、恐らく男子が少なくなったということになる。
- ・ ADHDは一律には扱えないので、不注意型と多動・衝動性型あるいは混合型によって大分違うというように考えなければならない。
- ・ 学校と教育の連携が重要。発達障害への配慮と言ったときに、それぞれの障害を組み合わせることを前提にしていかなければならない。

- ・ ADHDが加齢ともに行為障害になるというエビデンスはない。ただし、多動性や衝動性は、反社会的行動を取る確率を上げる個人のリスク要因の一つなので、ここをしっかり指導し、コントロール方法を教える必要がある。もっとも多動性や衝動性はADHDの子だけではなく、ADHDと診断されていない子でもある子は少なくない。そういった視点に立った集団指導も必要だ。
- ・ 確かに、幼児期、周囲の配慮で行動変容すると思うが、大人になった時に社会は合わせてくれないので、自分の中のリスク要因をセルフコントロールすることを教えることは、子供の年齢がいくつであっても全てのライフステージを通して必要

【LD（就学前の段階から小学校段階まで）】

- ・ 発達障害は、学習面の困難と行動面の困難に分けると、学習面の困難についての対応が遅れている。行動面の問題のない子についての対応が遅れている。
- ・ LDについて、教育的な定義でいうと、聞く・話す・読む・書く・計算する・推論すると6個の特徴があるが、医学的モデルでいくと、ここに読字障害、読むと書くと計算するという三つがこの症状にある。
- ・ LDも、早期発見、早期治療というのがやっぱり必要で、アカデミックスキルは自然に身に付けることができない。使用することの困難、理解することと表出することの困難と言われている。普通の子は遊んでいるうちに身に付くことでも、LDの子は自然に身に付かないので、何か手助けして、そこを身に付けさせることが大事で、そういう配慮や支援が乳幼児期に必要な。
- ・ 小学校では、教科学習が始まってくるため、特に読み書きや計算に困難がある場合には、教科学習面で遅れが出てくることがある。
- ・ 学習面に問題があるというのは、アンダーアチーバーであるとか、知的に遅れがある子とか、家庭環境が悪く、例えば学習に身が入らない子供との区別が非常につきにくい。

- ・知的レベルに比べて、学習面の到達レベルが低い子供の中には、認知的な能力に問題があって、例えば視覚的認知が悪いとか、聴覚的認知が悪いとか、それから短期記憶が悪いとか、ワーキングメモリーが悪いとか、そんなようなことで学習がうまくいかない子供などがいる。
 - ・特徴が出たときに、その特性を調べ、診断なり判断をして、それに合わせた指導をすることが必要で、そういうことを小学校段階ですることが大事。
 - ・ADHDやPDDの併発をしている子供も結構いるので、行動面の問題が生じてくることがある。
 - ・失敗ばかり重ね、自己有能感を失っている子供や、あるいは周りの子供とうまくいっていないケースがあるので、指導や小さな成功体験をさせてあげることによって、自信をつけさせる、あるいは周囲の理解を促すことが大事。
-
- ・LD、特にディスレクシアは早期発見早期介入の効果がフィンランドの研究で証明されている。就学前の時期に、しりとりや言葉集めなど言葉遊びが苦手だったり、似ている音の聞き分けが苦手だとか言葉の言い間違いが多い等があると小学校に上がってから読字に苦手さが出てくることが多い。
 - ・視覚的（眼球運動や輻輳機能、視覚的注意時間等）な苦手さがある場合でも読みが苦手になることがある。
 - ・字を覚えるのが苦手であれば読むのが苦手になり、読むのが苦手だと書くのも苦手になるケースは非常に多い。また、読むのが苦手であれば読みたくない、読まない、語彙が増えない、知識が増えないと学習全般に響く。だからこそ、小学校に入る前に少しでも音韻を鍛える、視機能を訓練するといった視点を踏まえた指導をしておくことがとても重要になる。同様の視点で、小学校1年の段階で読み書きに苦手さがありそうな子供には早期介入する必要がある。時間が経てば経つほど予後は悪いことを教員は知っておかなければならない。
 - ・LDの子供は極端に不器用だったりすることがあるので、それが後の書字障害につながることもある。粗大運動、協調運動、巧緻性が苦手といった体を使う訓練もこの時期に行い、体を作っておくことが大事。それが学習レディネスの強化になり、のちの言語学習の土台を作る。そういうことを就学前に指導に当たる人間は知っておかなければならない。

【LD（中学校段階から高等学校段階まで）】

- ・教員は、小学校からの引き継ぎがほとんどないため、中学校・高等学校の段階になると、LDなのか、本当に知的障害なのか、サボタージュでこうなったのか、区別がつかなくなってしまっている。そのため、全部ひとまとめにされてしまうことがある。
- ・これで良いんだという安心感を中学校・高校で与えてもらえないため、自尊感情が低い。仮に暴れても、パニックを起こしても、知的に高いように見える他の発達障害の人たちと違い、LDの子供は、知的な遅れがなくても、本当に勉強ができない、書けない、読めない、計算できないため、これで良いんだという部分をきちっと把握できない。

- ・自己理解は、小さいときから少しずつさせていかないと、中学・高校になって、「自己理解しなさい」と言っても無理
- ・その時期その時期の何か問題が起きたときに、「あなたはそう思うかもしれないけれども、ほかの人はそう思わないかもしれないよ」と、きちっと教えて安心感を与え、「ああ、そうか、みんなはそう思わないのか」という気持ちをどれだけ与えることができるのかがすごく大事
- ・例えば視覚障害とか聴覚障害であれば、タイプライターが使えたり、読んでもらえるのに、LDは書字障害があるのに、本人のために必要なパソコンやタブレットなどの機器を使わせてもらえない。必要な機器をきちっとその子供に必要な整備として認める必要がある。もう少し教員の理解が大事
- ・中学校を卒業するときに、高校に行く場所がない。小学校を卒業するときに、中学に進学先がない。特別支援学校に最終的に落ち着くが、読めないだけ、書けないだけであって特別支援学校の対象児ではない子供がたくさんいる。

【児童・生徒の二次障害などのメンタルの部分について】

- ・幼少期からの失敗体験だったり、周りから、どうして自分がこういう行動するのかということ認められてこないと、ストレスで強迫性障害や適応障害などが起こりやすい。学校では不登校やいじめなどの行動として現れる。
- ・不安障害として、自尊感情や自己評価の著しい傾向、自己統一性が比較的うまくいかないといったような問題も起こる。自分について悩み始めると、鬱障害という形になる場合もあり、行動問題や精神障害が、発達障害の子供たちにはよく見られる。
- ・幼児期に関しては、まずは障害の基本に寄り添いながら、保護者の方々へのサポートがとても大事。メンタルの問題では、不安や緊張感が高いと考えられるので、そういったことに対するアタッチメントの軽減に努めたり、適応を上げたりしていくような援助が必要
- ・学童期に関しては、子供たちにとって、学校生活が楽しみな場でもあり同時に、トラブルが起こりやすく、困難と失敗を重ねやすい場とも捉えられる。メンタルの問題では、何につまづいて問題が起きたのか、経緯をきちっと探ることが重要。それを踏まえ、環境調整のポイントを見つけていくことがとても大切。積極的に医療との連携を図ることも大事
- ・単独の障害ではなく、かつ不応症症状を起こしてしまうと、非常に複雑で永遠の問題を抱えてしまう子供も出てくるので、学校、医療、福祉など、多職種で連携を図って、子供たちをサポートしていくことが大事
- ・思春期は、自己評価が低いとか、自分がうまくいかないことで自分と向き合えなければいけない。医療機関とか相談機関等を有効に利用し、また薬やSST等、精神療法などを受けようにしていったらいい。
- ・予防としては、早い時期から、つまづき体験を極力作らないことや、対人関係やSOSの出し方等の様々なスキルを向上していくことが望ましい。
- ・二次障害が起こり得るということを教員がきちんと把握していくことがとても大事で、サポート体制をきちんと作っていく必要がある。